

## 思春期保健活動を進める上での学校との連携に 関する研究

村上 節子 , 太田 敦子 , 杉本 博子  
佐々木蓮子 , 佐藤 静

要約：これまで当支所では思春期保健学級という名称で管内の高校への集団教育を行ってきたがそのあり方と関係者の連携について検討するため、実際に思春期の児童生徒に対応している養護教諭から思春期問題の現状をアンケート調査にて聞き取り、さらに高校養護教諭との話し合いをおこなった。

見出し語： 思春期学級、養護教諭、アンケート調査、学校との連携

### 研究方法：

管内小中高等学校の養護教諭26名を対象に最近一年間に受けた思春期に関する相談の内容、対応の仕方、保健所に対する要望などについてのアンケート調査を行い、さらに管内高等学校養護教諭と思春期保健対策について話し合いを持った。

### 研究結果：

#### 1、アンケート結果

26名に対して無記名でアンケート用紙を郵送し21名の回答が得られた。

最近一年間に養護教諭が受けた相談で多かっ

たものは「身体の病気」「友人関係」「心の病気」の順だった。年齢が上がるにつれ問題が多様化し、男子は「登校拒否」や「いじめ」、「男女交際」や「容姿」「喫煙」と続き、女子は「月経」「家族関係」と個人的なものや精神的なものが多くなり、解決が難しくなっている。

対応方法はプライバシーに関するものが多いため学校内で処理するものが多く「保護者家族と話し合う」や「受診の勧め」「他機関へ紹介する」は少なかった。またこれからは医療機関なども利用したいと答えている。

思春期保健についての集団教育は半数以上の学校で行われており、主に学級担任が男女交際

や性教育について行っていたが、その他の問題については保健所が行っている思春期保健学級を除けばほとんど行われていなかった。

今後必要なこととして「教職員間の問題の共有化」と「教職員への研修」「保護者への知識の普及」が多かった。

保健所に要望することは、現在思春期保健学級を行っている3高校を含む6名の養護教諭が児童生徒に対する集団教育を希望し、また処遇困難な事例に対する対応助言を6名が希望していた。

しかし実際に保健所を利用したいという人は少なく、これまで保健所が行ってきた思春期保健学級を知らない人も半数いた。

## 2、高校養護教諭との話し合い

これまで保健所が行ってきた思春期保健学級は熱心な生徒へは大きなインパクトをあたえたということだった。学校外の違った立場や違った視点の講師から話を聞くことは生徒にとって新鮮にとらえられるようだ。直接生徒の生活に変化はみられなくても高校生活の中で何かこころに残るものがあれば、との事で引続き開催してほしいとの要望があった。

ある高校ではこの学級での性教育をきっかけに性に関する相談が増え、生徒との距離が縮まった。また受講しない生徒からも聞きたいという声が出て、養護教諭が資料を作成しロングホームルームで各クラス担任が取り上げたところ、担任と生徒のコミュニケーションが良くなった。保健体育科の教師からは「授業でやっていることをなぜ今更。」という声もあったが、保健体育の試験では生徒の回答に間違いが多くマスコミ等から誤った知識を得ている様子がわかる。

やはり専門家による思春期保健教育は必要であるとの話が聞かれた。

学級の内容は高校からの要望に沿って決定しているが、講師によっては学校側が意図したものと違う講演になることがある。より効果を期待するには事前に高校や講師、保健所との連絡が十分図られなければならない。

学校側が保健所にこれから行ってほしい事業としては親に対する知識の普及であった。生徒に行われている教育の内容を親も知っていれば話のきっかけもつかめるだろうという考えから親子が気軽にいろいろなことを会話出来る環境づくりに保健所も協力して欲しいとの意見が出された。

また、養護教諭を含めた教職員の研修の機会をつくることも要望としてでていた。

## 考察：

高齢化社会のなかにあって将来を担う青少年が健全な生活を送れるよう支援する教育活動は大切なことである。

この意味でもこれまでわずかながら高校との連携を図り思春期保健教育を行ってきたが必ずしも十分ではなかった。

今回の研究では結果でも述べたように、学校で抱える思春期問題は複雑多様化しており、学校での対応も十分にできているとはいえないことがわかった。今後ますます増加傾向にあるこの問題に対しては、養護教諭をはじめ学校関係者のレベルの向上が不可欠であり、そのための研修会やケース検討会等の充実を保健所に期待していた。

思春期保健についての集団教育は半数以上の学校で行われており、小学校高学年に対する性

教育が義務化されたことを考えると、この教育を受けていない現在の中学生以上に対する教育、個別化している問題の対応の仕方、性教育以外の問題をどう扱って行くかが今後の課題である。また学校での思春期保健教育から得た知識を子どもたちが自分のこととして理解し、これを素直に受けとめられるようにするには、家庭における親の態度が重要と考え、これまで管内の高校生だけを対象に実施してきた思春期保健教育を高校生だけにとどめず、地域を包括した対策として発展させていくことが必要であると思う。

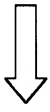
アンケートでは特に思春期保健学級を通じて連携を図っていた高校養護教諭からの保健所に対する要望が強いことから、これまでの活動内容を充実し広げていく必要がある。

また、保健所の役割として当管内（地域）でおきている思春期問題や地域ぐるみの環境づくりを共に考える連携体制をつくり、思春期保健対策に貢献するという点が明確になった。

地域の思春期保健問題を共有し連携を図ることは不可欠であるが、そのために関係者同志が一同に会し、思春期問題を検討できるシステムの構築が急務であると考えられた。

#### 参考文献

- 1) 荒木均 他：思春期保健活動に求められるもの、保健婦雑誌、46(8)、618～622、1990
- 2) 高石昌弘：学齢期保健の課題と展望、日本公衆衛生雑誌、38(10)、119～131、1991



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:これまで当支所では思春期保健学級という名称で管内の高校への集団教育を行ってきたがそのあり方と関係者の連携について検討するため、実際に思春期の児童生徒に対応している養護教諭から思春期問題の現状をアンケート調査にて聞き取り、さらに高校養護教諭との話し合いをおこなった。